

旧幕府か新政府か 藩庁移した小笠原藩の葛藤 香春藩開庁

藩主葬儀を上野の興国寺で挙行。 金田の地、清石山に御廟建つ。

1年9か月前に没した 藩主・忠幹の葬列

小笠原藩は、慶応3年（1867）3月に藩庁を香春へ移し「香春藩」として存続します。長州軍との敵戦で、田川郡内の各地では、兵役や援助が要請され、ここに多くの藩士が移り住むことになりました。

香春藩はようやく、6月2日に藩主・小笠原忠幹の死を公表。7月8日に興国寺・福智町上野）で盛大な葬儀をとり行いました。興国寺から金田の舊殿寺までつらなる位牌の列は、家臣や僧侶など2百人近くがそれぞれの配置につき、整然とした行列であったといえます。舊殿寺には、小笠原家



「香春藩庁門」小笠原藩主が領内を巡視する際の休憩場所。御茶屋」が、香春藩の政庁となった。写真は、香春小学校内にある御成門（旧藩庁門）。

舊殿寺西側の小高い平地では、1年9か月前に死亡した藩主遺体を新しい棺に移し替える作業が行われました。周囲に小笠原家の家紋（三階菱）入りの幕が張り巡らされ、読経が流れる中、白装束に身を包んだ家臣と数人の僧侶が、すいぶん長い時間をかけて行ったといえます。

当時、幕の中をこそり見たおぼろさんが、大きな襦の中ら赤い色をしたお茶のような水がすいぶん出たと話していたそうです。また、この腐敗防止の薬液によって一帯が水浸しになったとも伝わっています。こうして9代藩主・忠幹の墓が金田の地に造営され、金田廟とし、以来、地元ではここを、御廟と呼ぶようになりました。



「興国寺」足利尊氏が豊前国安国寺に指定した古刹。ここで忠幹の葬儀が行われた。左の桜は尊氏が戦運を占った墨染桜。小笠原家も厚遇し、瓦に三階菱の家紋がある。



「小笠原忠幹」幼名は豊千代丸。6歳で父の家督を継ぐ。藩主・知事を経て明治17年に伯爵となる。が、明治30年に36歳で死去した。（画像／錦陵同窓会所有／北九州市立自然史・歴史博物館提供）

9代藩主・忠幹の葬儀の後、世継ぎの豊千代丸（6歳）は、名を小笠原忠忱と改め、10代藩主として熊本で家督を相続します。小倉新田藩のちの千束藩）藩主・小笠原貞正が後見人となり、藩政を監督。藩は疲弊のなかに復興へと努めていきました。

一方、徳川幕府は、諸藩を動員しておきながら一つの藩に過ぎない長州藩を倒せなかったことで、その軍事的権威が大きく失墜。慶応3年10月14日、徳川慶喜が国の統治権を朝廷に返上する「大政奉還」を行いました。



「正福寺」赤村にある香春藩校の支校となっていた寺。新藩主・忠忱拜着の際、その屋形（藩主邸宅）となった。

藩の存亡をかけて 政府に従い会津へ出兵

翌年の慶応4年（1868）1月、鳥羽伏見の戦いで「戊辰戦争」の戦端が開かれ、朝廷から諸藩に兵力の差し出しが求められました。

新政府に恭順の意を示した小笠原藩は、苦悩の末に参戦を決めて、2月に鳥羽志津摩を指揮官として出兵します。兵およそ6百人、軍夫を加え千人を超えたと記されています。

かつて、小笠原藩は、徳川家康の孫にあたる小笠原忠真が、播磨明石から初代藩主として入国。3代将軍・徳川家光から九州諸大名監視という特命を受けていました。その幕府譜代の藩が、つい数年前まで味方だった会津などの諸藩、そして徳川家と戦わざるをえなくなつたのです。藩士たちはどんな思いで引き金を引いたのか。幕末維新という時代の激流が、小笠原藩を皮肉な運命へと巻き込みました。

やがて、10代藩主・忠忱が、慶応4年3月12日に熊本から正福寺・赤村に帰着、その後も続く小笠原藩の激動を知るよしもありませんでした。



「安永勝次郎」より伝わる旗。赤池町史には「安永勝次郎が白虎隊の若者田中辰治を捕虜として連れ帰って育てたが、まもなく没した」とある。白虎隊は会津藩が組織した15歳から17歳の部隊で、田中伝治の名が確認されたという。右は旗の所有者で安永氏の孫・下藤スギエさん（市場出身・直方市在住）祖父はわたしが幼いときに亡くなりましたが、よくヒザの上で昔話をしてくれたのを覚えています。



【会津戦争ゆかりの品】 会津戦争に参戦した安永勝次郎（市場草場）より伝わる旗。赤池町史には「安永勝次郎が白虎隊の若者田中辰治を捕虜として連れ帰って育てたが、まもなく没した」とある。白虎隊は会津藩が組織した15歳から17歳の部隊で、田中伝治の名が確認されたという。右は旗の所有者で安永氏の孫・下藤スギエさん（市場出身・直方市在住）祖父はわたしが幼いときに亡くなりましたが、よくヒザの上で昔話をしてくれたのを覚えています。

小笠原貞正と媛子

小倉・小笠原藩の9代藩主・忠幹が39歳で死去した後、まだ4歳という幼い世継ぎ・豊千代丸、10代藩主・小笠原忠忱を補佐し、藩を監督したのが、小笠原貞正です。貞正は、小倉藩の支藩である新田藩（のちに千束藩と改称）1万石の藩主で、その領地は小倉領内にあり、長州戦争後、厳しい状況へと追い込まれていく本家・小倉小笠原家の再興に、藩主後見人として尽力していきます。

そのころ、真正の正室・媛子は病を患い、興国寺で病氣静養につとめましたが、明治2年2月14日に亡くなりました。波乱に満ちた時代に息をひきとった小笠原媛子の墓は、小笠原家ゆかりの興国寺境内に、ひっそりと立っています。



「興国寺」上野の本堂裏にある小笠原貞正の正室 媛子の墓